



エコロジーとフェミニズム：  
生（life）への感度をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福永, 真弓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004834">https://doi.org/10.24729/00004834</a>

論文——2014年度コロキウムより

## エコロジーとフェミニズム： 生（life）への感度をめぐって

福永 真弓

### はじめに

本論の目的は、生への感度<sup>1)</sup>という言葉を手がかりに、エコロジー<sup>2)</sup>とフェミニズムの交わる場所から生まれた思想的可能性の現在を追いかけてみることにある。思想的な深みや理論を細かく掘り下げる、ということは次の機会に譲り、エコフェミニズムという思想が環境問題を考える上で与えてくれる重要な示唆について考えてみたい。

このように考えたのは、東日本大震災と福島第一原子力発電事故事件の後、復興や再生という言葉が飛び交うなかで、生の感度をめぐる問題に苦しむ人びととその言葉に出会ったからである。震災以後、避難所生活、仮設住宅での暮らし、強制避難、自主避難、帰還、あるいは、転居先での生活再建という選択まで、一刻一刻変容していく時間と共に人びとが置かれた状況の様相は変わり、人びとのあいだの状況の差異はどんどん広がり続けている。

家族やコミュニティ再生という言葉が復興という言葉と共に行きかい、被害や被災の度合い、それぞれの認識、対応や選択肢を「比べる・比べられる」「測る・測られる」ことが常態化する日々において、相対化して計ることと、絶対的で計れないと思っていること、そのはざまから浮かびあがるのは、生への感度という問題である。この場合、生とは、単に物理的な生命を意味するのではなく、生き方も含みこんだものを指す。

「うちだけ気にしていると地域の人に迷惑がかかる、だけどやはり心配なことは心配。ただ気にしていると自分も参ってしまうから、日常の中で

は気にしないようにしている。だけど、……」<sup>3)</sup>と言葉を飲み込みながら、子どもや若い世代の低線量被ばくへの懸念と、故郷で暮らすために必要な気遣いの狭間で言葉にするのをやめ、代わりに息を大きく吐き出す人びとがいる。このようなため息の深刻さは、震災後、生をめぐる「役割」が目に見える形で再編され、表象化されていることと無関係ではないように思える。

本論では、生への感度を大切にしたい、という人びとの生活の地平からの思いを生かす社会の在り方とは何か、生活と生命のことこそ政治のことである、と捉えてきたエコフェミニズムの議論を参考に考えてみたい。

## 1. 生への感度が問題になるとき

自分の生に対して、預かっている生に対して、そして周囲の生に対して（人間だけでなく、人間社会と共にあって豊かさを支えてくれるほかの生き物の生も含め）、どのようなケアと配慮ができるか、あるいはなされるべきか。そのために、どのように社会として生を気かけられる仕組みや状況を作るのか。すなわちその生に個人として、社会として、どのように敏感でありえるか。

これらの問いは、エコロジーの思想運動の核となる問いであり続けてきた。預かっている生の中には、同時代の子どもたちや高齢者などのほかに、今の私たちがつなげなければ存在しえない未来の世代も入るだろう。劣悪な環境下での労災、公害など直接的に生に危害を及ぼすものから、生きがい、生活の質、自然保護まで多様な位相と形態に問題化されていても、ケアや配慮の対象が近い人から人類一般、動物や非生物にまで広がっていても、エコロジーの中心を貫くのはこれらの問いである。

だが福島第一原発事故に露わになったのは、預かっている生に敏感でありたいと願いながら、他の生のニーズや生き方の幅とぶつかる選択肢の中で惑い、時に他者との対立が生まれてしまうという構造であり、状況であった。

人がいなくなって四苦八苦している故郷を目の前に、「国に見捨てられ

た自分が今度は故郷を見捨てられるのか」(高村 2013)、そう思えばこそ、故郷から離れないという選択肢を選んだ。だが、「それには不可欠な事項がある。それをクリアしないと子どもは育てられない」(同上)。不可欠な事項とは、内部・外部被ばくを抑えるために、外遊び、食べ物の制限、健康診断や線量モニタリングの継続である。しかしそうすることで、自分が今まで享受してきたような、落ち葉を拾い、蛙を捕まえ、水辺で遊ぶ、という子どもの発育に重要かもしれない活動、その中での子どもの楽しみ、情緒発達や学習の機会を失わせているのかもしれないと思い悩む。日々、そのように悩みながら、子どもと共に福島原発事故で線量被ばくした土地に住むという選択をしたことが、外部の人びとから「子どもを殺すのか」などという言葉に浴びることになる。また、積極的に自分の置かれている現状を話すことが、他ならぬコミュニティの人びとの批判の対象になってしまう<sup>4)</sup>。

平生も人びとは様々な状況に応じて選択をするとはいえ、上述してきたような苦悩それ自体が、原発事故がなければ生まれなかった原発事故被害の1つであろう。選択肢は誰かの人生の一時期を左右することになるが、とりわけ子どもと高齢者の場合は、時間の問題がある。子どもの場合、同じ1年間といえども、大人の時間との「速さ」と「意味」の度合いが異なるのではないか。あるいは、高齢者の場合、1年ごとにおいていくことを考えれば、共に在れること自体の意味が変わってくるのではないか。そう思う中で、自身だけでなく、自身が生を預かる他の生のために、よりよく合理的であろうとすることそれ自体が、平生とは異なる重さを持って彼女たちの目の前にある。そして別の「よかれ」と思うことが、生に敏感になろうとすることとぶつかるから、判断は難しくなり、苦悩は増える。その選択肢が、母として、嫁として、娘として、コミュニティ(育ってきた場所)の一員として、自分自身が拠り所にしてきたこと、社会的な期待とそれに付随する評価とも直接に結びつくからこそ、1人1人の存在の存立に関わる問題である。

そして、まさに存在の存立に関わる問題であるがゆえに、とどまることを選んだ人、離れることを選んだ人、帰還することを選んだ人、そのよう

な選択肢を自分自身で選べなかった人、生への感度をめぐる選択は、それぞれの状況のあいだで分断を生む。状況の差異と、そこから選んだ答えとしての他者の生き方が、異なる人びとの生そのものを揺るがす差異になるからだ。たとえば、故郷にとどまることを選んだ人は、子どもの生に対する安全性と責務ゆえに、退出することを選んだ人から、退出することを選んだ人は、故郷とそこに生きる人びとへの負い目をかかえるがゆえに、故郷にとどまることを選んだ人から、自分の生を揺るがされる。そこに互いのことを認められない亀裂が走っていく。

ではわたしたちは、生への感度をめぐる差異と分断の複雑な状況を、どのように紐解いていくことができるだろうか。異なる状況の中で違う方向を向いてしまう人びとのあいだに、どんな共通する土台を築くことができるだろうか。そして、当事者とは異なる場所にいる「わたし」は、その紐解きにどう寄与できるだろうか。

この点について本論では、人びとが複数抱えていく役割——母であり、嫁であり、娘であり、という複数が常に併存すること、それらをひっくるめて「わたし」であることをどう捉えるか、というところから考えてみよう。どの役割でもない「わたし」と、預かった生のニーズや欲求の差異ごとに求められる役割の切り取られた「わたし」。そのことを考えることは、フェミニズムが運動と思想の中で、通ってきた道でもある。

## 2. 「わたし」、生命、生活

少し、人びとが日常の中で課され、引き受け、自ら名乗る「役割」について考えてみよう。震災後、「役割」、中でも母という役割と、そのときに「母として～を」と表現される母性は表象化され、メディアに度々登場するようになった。週末には反原発・卒原発のデモや集会在頻繁に開催され、マスメディアでは、心配する「普通の」母が子どもを抱えてデモに参加し、声をあげる姿が繰り返し報道された。子どもへの被ばくを懸念して親子で避難することを指して、「母子」避難という言葉が使われるようになった。実際には、多くの父親、子どもをもたない夫婦、シングル、さま

ざまな主体がそのような動きをしていたが、表象化されたのは幼い子と母、動機としての母性であった。その後も母や母性という表象は、「いのち」という言葉と共に、実際に人びとをまとめたり、運動の核を構成したりする際に依拠されるフレームとなっている。

それは、リブ<sup>5)</sup>、そしてフェミニズム<sup>6)</sup>の女性たちが闘ってきた道を後ろ向きに進んでいるように見えるかもしれない。リブやフェミニズムの女性たちは、「個人的なことは政治的なこと」と、この母や母性と向き合い、公私二元論を乗り越えようとしてきた。おぎゃあと生まれたときから死ぬまでの生と性をてらいもなく、直截的に赤裸々に内実を表現しながら、権力性や非対称性を問い、別の社会の姿を手探りしてきた。その経験を持って、フェミニズムはこの再フレーミングをどう捉えているか。フェミニズムからは、かつて反原発ニューウェーブの時にもなされた、「反原発運動の母性主義イデオロギー」を指摘する声が再びあがる一方で<sup>7)</sup> (石塚 1991; 松本 2011)、1986年のチェルノブイリ原発事故後の反原発ニューウェーブの時とは異なる<sup>8)</sup> 繋がりを模索する動きもある。

たとえば大橋由香子は、母や母性というフレームへの違和感を率直に語りつつ、その表象が制度（はみ出したものにサンクションを伴って統制をしようと働きかける仕組み）として働いていることを的確に指摘している。その上で大橋は、そのようなフレームの中に、あるいは外に置かれた主体の多様な自己同士が、実際に出会うことを通じて得られるつながりから、既存の制度（母や母性だけでなく、正常な家族、正常な身体、正常な生き方を含め）群とは違う価値や社会の仕組みを構想する契機が生まれることを期待する（大橋 2012）。そして、再構築されていくフレームを頭ごなしに否定するのではなく、その中にいる人とも手を携えつつ、実践の中からフレームの意味や形を組み替えようとする試みを大事にしようと呼びかける。そこで問題化され共有されるのは、生活における異なる立場で生への感度の問題に向き合う者同士、あるいはそうではない他者の出会いの経験であり、その出会いが起こる場所、生活の地平そのものである。

この生活という焦点について、かれこれ30年前、反原発ニューウェーブが始まる以前の1985年に、江原由美子はリブやフェミニズムからエコロ

ジーに接近した女性たちの運動について次のように指摘した。

公害反対や自然食品運動、エコロジー運動等との連帯を深めた女性解放運動の一部は、女性に対する抑圧的体制をイコール近代主義の限界として位置づけ、手づくり志向・自然志向・共同体志向等、矮小化された近代主義批判を解放の唯一の方向性として教条化してしまった。（江原 1985）

ここで指摘されているのは、近代主義批判を基にオルタナティブを形成する方向性が「手づくり志向・自然志向・共同体志向等」に矮小化されていることの問題点である。江原が「矮小化」と批判的に述べるのは、単純な批判と否定では、近代主義や科学、それらの権力と構造が人びとの身と生に刻まれている様相と、その中で生を生きている、というごく当たり前の現実を微細に捉えることができなくなるからである。言うまでもなく、生活の場は「それは私的なことだ」と閉じ込めたがる政治経済的力と制度が幾重にも働きかける場であるし、自然に優しい手づくり・自然・共同体志向は、「家庭的で優しい母・妻としての女性像」を補完・補強しうる。そのことの十分な批判なく、その領域を「解放の唯一の方向性として教条化」することによって、私的領域に女性たちに戻れと働きかける力にからめ捕られうる。そのことを端的に危惧し批判する表現である。

この批判は、現在ではどのように受け止められるべきだろう。1990年代以降の経済的グローバリゼーションの深化、情報技術の進展、労働の調整弁たる非正規雇用の社会全体への広がり、一層の高齢化とケアの社会問題化、生殖医療技術とその市場化など、政治経済的力と制度は、いっそう複雑に、かつ多様なスケールで人びとに働きかけ、日常生活の中で生を構造化している。

そのような現状の中で、今、復興やコミュニティ再生という言葉と共に、たとえば母や母性という表象が、「すわりは悪いけど、現実的かつ戦略的にわたしが拠る所にできるのはこれ」と依拠される現実があるなら、なすべきことは、「あれは母という表象や母性主義を呼び起こすからよくない」

と簡単なレッテルを貼って否定することではない。それでは逆に、複雑かつ多様化したスケールで入り込み、生への感度をめぐって、女性たちをはじめとする他者の生を預かる人びとの、息苦しさや生き難さを増しているものの正体が何かを見逃してしまう。問題は、彼女／彼たちの生の中にどのような構造化が重なっていて、その構造化されたリアルから、なぜその表象が拠り所となり、生のよりよい方向性を見出すために何が必要か、と探ることである。リアルを離れた言葉は届かず、フェミニズムは何ら実感のない言葉として人びとの日常を上滑っていくだろう。多くのフェミニストが考えているように、対象とすべき問題は領域を広げて深刻さを増しているように見えるにもかかわらず、である。終わりなき主体化がどこからも働きかける今、微細に張り巡らされた何の上に「わたし」があるのか探ること、それは江原の批判と矛盾するものではなく、むしろ彼女の指摘から深めていこうとすることであろう。

実はこの立場こそ、現在のエコフェミニズムの思想が必要としている新たな出発点でもある。以上の議論を念頭に置きながら、エコフェミニズムの思想を来歴と共に簡単にまとめてみよう。

### 3. エコフェミニズムとは何か

#### (1) 「自然化されていく」場所から自然性と女性性を問う

エコフェミニズムは1970年代の終わりから1980年代の初頭にかけて、社会運動、特に反原発運動や平和運動から芽吹いた思想と運動である。第二派フェミニズムとエコロジー運動の狭間で生まれたと言ってもよいだろう。当時のエコロジー運動におけるジェンダー視点の欠如や性差別主義への批判もあって、エコフェミニズムは、アカデミアと活動家が共にエコフェミニズムの哲学を現場から見出すことを最も重要な力点としている。非暴力の直接行動も多く、英国のグリーンナム米軍基地への核ミサイル配備反対運動、スリーマイル島原発事故後の反原発運動など、多くの運動にエコフェミニストたちは参加してきた (Philips and Rumens 2015)。近年でも米国のウォール街占拠運動 (Occupy movement) などにもその姿が見

られる。現場とアカデミアをつないで始まった思想運動であるがゆえに、米国のエコフェミニスト、カレン・J・ワレンは端的に、エコフェミニズムの哲学の特徴は、パッチワーク・キルトであることだと述べる。

エコフェミニストの哲学キルトは、固有の社会、歴史、物質的文脈をもつキルトの縫い手が作った複数の異なる「パッチ布」で出来ている。  
(Warren 2000 : 66)

「パッチ布」同士のあいだで緩やかに共有されている二つの視点は、エコフェミニズム思想の初期著作、スーザン・グリフィン『女性と自然』（1978年）とキャロリン・マーチャント『自然の死』（1980年）に既にみられる。1つは、歴史的な経過も踏まえた、人間による自然の支配と女性の自然化を伴う支配の不可分性と、そこからの人間の解放というテーゼ。もう1つは、有機的自然観や、精神と身体および次代の再生産を担ってきた女性の持つ自然との象徴的・実体的関係性を、解放のための青写真を支える思想、拠り所として理念化する試みである。活動家とアカデミア、両者の垣根を越えた協働の中からエコフェミニズムの理念は哲学的に磨かれ、実践活動としても成熟すると考えられていた。それゆえ、スーザンの著作が詩的であったことが象徴するように（＝「男性的」理性の言葉とは異なる論理、精神性、哲学の融合した形を表現する方法の1つ）、エコフェミニズムの思想は、詩、エッセイ、絵画など、論文や学問的表現にとらわれないすそ野を持つことがむしろよしとされて、多様な表現形態を持つという側面もあった。

自然と女性が共に支配の対象になる過程の分析については、脱構築的な見方と、マーチャントのように、近代以降の科学、資本主義、家父長制の複合的な支配に特に注目して分析する見方の両者が混然としている。

出発点は、「自然に関する支配——心とセクシュアリティ、人間抑圧、そして人間以外の自然——と、これらの支配形態に関連する女の歴史的地位の分析」(King 1989)である。脱構築主義的様相が強い場合は、自然主義的に、なおかつ観念的に女性原理を捉えて語ることはせずに、男性と女

性、自然と人間、身体と精神、理性と情念など、二元論的なものの見方がヒエラルキーと結びついてきたことを、自然破壊と女性抑圧に通底する問題とする（Warren 2000）。その見方を（弁証法的に）脱するため、関係論的自我を意識的に再構築することを試みる。このような主張は脱構築的エコフェミニズム（Dobson 1991）と分類されることもある。

一方、近代科学、資本主義、家父長制の複合体の批判的乗り越えに重きをおき、オルタナティブな社会・経済の萌芽を既にある生活実践や運動から見出し、連帯と理論的支柱を築こうとする立場は、1980年代半ばから明確な理論化が進んだ。

それは主に、クラウディア・フォン・ヴェールホフ、マリア・ミース、ヴェロニカ・ベンホルト＝トムゼンによる「自然化」と「主婦化」の分析と理論化によるところが大きい。第三世界フェミニズム、社会主義派エコフェミニズムと称されるヴェールホフらの議論は、欧米の資本主義は、周縁地域の資本主義に先行して存在した生産様式を収奪・支配することによって資本蓄積を得てきた、というローザ・ルクセンブルクの本源的蓄積論を基礎にしている。著書『世界システムと女性』（1988＝1995、ドイツでの初版は1983）でヴェールホフは、賃金化された労働の背後に、自然のもの、存在しないものとみなされてきた領域が創出され、者、モノが無賃生産として奪われていく搾取体制があるからこそ、資本主義は進行できることが指摘される。その領域、者、モノこそ、生命と肉体の再生産がなされる場であり、それらに携わる人びとであり、そこで必要とされ直接自然環境の中から見出されて利用される資源と自然環境そのものである。もちろんそこには、農林漁業など直接自然とのやり取りを含む「生産」の現場も含まれる。ヴェールホフは、労働力が「自然に」絶え間なく供給されるというフィクションの下にこのシステムは存立していること、また、女性、移民労働者、難民、農民、社会的被差別者など無賃ないし低賃金労働を提供する人びとが必要とされることを明らかにする。中でも典型的なのが女性であり、彼女はその「自然化」される過程を「主婦化」と呼ぶ。

主婦化の結果、出産能力、育児・介護・夫の身体や精神の維持などのケア労働を無償で提供する存在として、そしてそれに関わる領域は自然化さ

れ、私的領域化される。そこに留まる人びとは、能力や可能性を限定され、労働市場では市場の労働能力調整弁となる安価な非正規雇用者として扱われる。ケアを担う者としての立場と、その立場にあることの自負と責任が、産む性かつケアする性として安らぎと愛を与えること（＝自然が母なる自然として人間に必要な資源と精神的支柱となるように）と同一視される。そして主婦としての規範は、自然性を持つがゆえの本質的な規範としてさらに内面化され、文化的価値の高いものとして社会的に評価される。

同時にこれらと対になるような「男性化（＝企業戦士化）」もかつてないほど強化されてきたとヴェールホフは指摘している。

ミースとヴェールホフは、この自然化と主婦化の過程が、白人と黒人、（都市）労働者と農民、先進国と低開発国という関係性の中にある男性にも及ぶし、中心と自然化された周縁という領域の差を生み出すと指摘している。労働のジェンダー化、地理的空間のジェンダー化と共に、一方的な資源収奪と効率性と利潤を短期的に求めた結果の環境破壊がもたらされる。黒人、農民、低開発国が、自然に近い存在として「主婦化」され、従属経済を担う者とされていく状況は、資源と労働が同じ場所から収奪されていく状況でもある。そして資源の収奪は、例えば森林資源の収奪が日常生活物資を得るための生活環境を破壊し、鉱山開発が汚染地域を生み出すように、生活環境の破壊も生み出していく。そして男性が自然化と主婦化された従属経済の中にある状況では、女性はさらに彼らとのあいだとの自然化・主婦化を入れ子のように重ね、複数の暴力的関係性に身をおくことになり、その立場はいっそう低くなる。

この明晰な分析を持って、ミースらはエコフェミニズムの立場から、どのような経済と社会の仕組みが必要かを探索しようとする。それは、「自然化」されていく場所、環境破壊と共にあらゆるものがジェンダー化され、それらの現象があたかも本質的な根拠に依拠しているかのように組み替えられていくその場所から、身体と身体が置かれた場であることを実践の軸に、実践同士の連帯を通じて「もう1つの別の世界」を探そうとする試みである。

## (2) 自然化された場所から「生活の場」を再定義する

エコフェミニズムが、有機的自然観や、精神と身体および次代の再生産を担ってきた女性の持つ自然との象徴的・実体的関係性を、解放のための青写真を支える思想、拠り所として再編しようとする特徴を持つことは、以前に述べたとおりである。

だがこの点で、「パッチ布」には大きな違いがある。①女性であることの差異と固有性を象徴化し、それらに依拠する社会の構築を精神性の回復や文化的アプローチから目指す立場。特に、スピリチュアル・文化的エコフェミニズムにその傾向が強い。②脱構築主義フェミニズムは、関係論的自我を軸に、二元論的思考や価値の多様さではなく、その序列を問題化する思考枠組み自体を変容することを試みる (Warren 2000)。環境教育や自然活動経験などが入口となるため、結果として実践については①の手法に近づくこともある。③資本主義化の従属経済であることから抜け出し、自律的な社会をつくる実践を支えるため、歴史的・文化的文脈と連続性を持つ概念としてサブシステム領域の再構築を図る立場。④女性の立場についてはリベラルな平等性の達成を求め、環境についてはその解決を資本主義の修正により目指す立場 (男性と女性のあいだの能力的な差異はないとするリベラル・フェミニズムを背景に持つ立場)。

②は、ヴェールホフやミースの議論と共に、ミースと同じインド地域研究者のヴェロニカ・ベンホルト＝トムゼン、インドの生物学者でありエコフェミニストのヴァンダナ・シヴァによって実践から芽が拾い出され、理論化された試みでもある。ミースとシヴァは、従属経済化され、主婦化されていく人びとの生活そのものから抜け出すために、生命を産み、育て、生活を維持していくための生産 (サブシステム生産) に着目し、その「自然化」と従属経済化から救い出すことに活路を見出そうとする。サブシステム生産とは、生産・再生産活動両者に携わる存在 (多くの場合は女性) が持つ、生かし育てるための土地との協働的関わり の総体である。彼女たちの思想は『エコフェミニズム』 (Mies and Shiva 1993, revised 2014) に表わされ、後にサブシステム生産に依拠することは、「もう一つの世界」を作る重要な思想・実践的核であることが生活実践の中から提

起され、具体的にサブシステム生産領域を改めて生み出していく運動の可能性が事例と共に議論されている。その中で、日本の生活クラブ生協の活動は、先進国におけるサブシステム生産領域を広げるものとして評価されている（Mies and Thomsen 1999）。

実はこの②の観点から見たとき、しばしば、①と④については批判が寄せられる。同じ女性のあいだでも、歴史的文脈とそれに絡む資本主義的な労働を介して、支配-被支配の関係を伴う格差が存在する。米国内では長くアフリカ系女性・男性が白人家庭の家事労働を担当してきたし、市場のもとで家庭から賃金を介してアウトソーシングされた家事労働は、やはり有色人種系の女性に担われているという現実もある。グローバルな経済活動を介して食品や生活雑貨などが手元に届く現実があるとき、それもアウトソーシングであることに違いはなく、低開発国内で自然化と主婦化のもとにある女性がその現実の先に存在することも事実である。スピリチュアル・文化的エコフェミニズムと、リベラル・フェミニズムを基にする④の立場が批判されるのは、この女性同士の格差の構造を棚上げしてしまう議論だからである。

### (3) エコフェミニズムへの批判

こうして多様に展開してきたエコフェミニズムだが、批判も多く寄せられた。主にまとめてみると、以下のようなものがある（Thompson 2006; Gaard 2011）。

①本質主義的である。②「自然」の構築性、セックスとジェンダーの相互の構築性を捉えていない。むしろ本質主義的に自分たちが構築し直してしまっていることに無頓着である。③資本主義以前、前近代の中に見出した生活様式、有機的自然観などに理想を見出すまなざしそれ自体がオリエンタリズム的であり、その表象化は創造の産物でしかない。④（スピリチュアル・文化フェミニストが好む）女性原理や女性性の主張は、単に男性優位と女性劣位の社会像を逆にひっくり返すだけの支配的な社会構築の主張でしかない。しかも逆に男性性補完の論理として取り込まれる。⑤女性は一枚岩ではない現実を反映しておらず、そして、多様な性と生のあり方、

生き方の幅の可能性を狭めてしまっている。階級、エスニシティ、人種、障がい、被差別、年齢などによる差異について考えていない。⑥「産み育てる」ことについて、身体的特徴の差異が認められるとしても、それが社会的な優位と結びつかねばならない理由はない (Eckersley 1992)。

難しいのは、ミースやシヴァらのように、歴史的な分析を踏まえた上で、女性性は構築されたものと言っても、本質的なアプリアリなものとして解釈され (Dobson 1991)、批判する相手 (家父長制資本主義) にとりこまれてしまうことである。このことは後述する日本でエコフェミニズムに対して寄せられた批判とも関係する。

だが実は、この批判を踏まえながら、それでもこの「再構成」について、産むこと、育てること、産まないこと、育てないこと、そういうことの多様さを抱える「わたし」から考えることが、現在においてはとても重要になる。

この点については最後に再び言及することにして、その前に、日本でのエコフェミニズムの議論がどうであったのかを次に簡単に述べておこう。

## 4. 日本におけるエコフェミニズムと生への感度

### (1) 青木—上野エコフェミニズム論争とは何か

日本では80年代の初期に、文化人類学者の青木やよひがエコフェミニズムを紹介した (青木 1983)。青木は、環境破壊と人間性の抑圧からの解放を目指すために、競争原理と経済的合理性にとりつかれた人びとの精神性の変容が重要であると論じた。そして、みずからのうちに生命を宿しそれを産み出すという、宇宙の母なるエロスとしての妊娠と出産、そこから新しく見える世界観をもって、宇宙原理と女性原理 (「天なる父と母なる大地」という雌性性) のバランスが取れた状態を取り戻すことを提案した。これだけ書くとときわめてスピリチュアルな思想だが、青木の議論は次に述べる2つの思想を支柱としている。

1つは、文明の普遍化神話を問い直すことによる構造的暴力の解体を目指す思想。青木は、低開発国における構造的暴力、特に文化的アイデンティ

ティ収奪を伴う経済的搾取とジェンダー化の問題は、日本国内における女性が直面する現実にも重なりとみる。青木は、構造的暴力を解体するには、目に見える差別や格差だけでなく、文化的アイデンティティを介した社会的変革が必要であるとしている。

もう1つが、エコロジーとフェミニズム両者への同時代的危機感と確信である。いわく、「エコロジーを欠いたフェミニズムは科学至上主義に陥り、これは南北差別をますます強固にするだろう。また、フェミニズムを欠いたエコロジーは生物学至上主義に陥り、エコ・ファシズムに急速に傾斜していけだろ。……この危機を敏感に甘受しうるのは女性的感性で」ある（青木 1994：157）。この時の「女性的」というのは、生物学的性に依拠するものでなく、男性の中にも女性の中にも存在する雌雄性、という意味合いである。このような思考に青木が至ったのは、ジェンダーにおける南北問題が焦点となった1975年の国際婦人年世界会議への参加経験、宇宙的原理と自然性を独自に表現する米国先住民ホピ族との出会いがあるという（青木 1994）。

青木の議論は、当時、米国、オーストラリア、ヨーロッパで議論されていた初期エコフェミニズムの影響が強い。先ほど（3）で論じてきた、初期エコフェミニズムに向けられてきたのと共通する批判が、日本でも青木に向けられることになる。青木のエコフェミニズムは、1985年のいわゆる上野千鶴子－青木やよひのエコフェミニズム論争において徹底的に批判され、日本ではそれ以降、エコフェミニズム、あるいはエコロジーとフェミニズムを共に議論する機会は、学問的にも、一般的にも少なくなった。

では、上野はどのような点を批判したのだろうか。

『現代思想』上で述べられた上野千鶴子の批判は、青木が依拠するイヴァン・イリイチへの批判を通じて行われた。特に、①前近代・非近代・非西欧の恣意的に観念形成したものと、現実にも多様に存在するそれらの実態とを取り違えて論じていること。②性差別の発生を近代以降にしか見ず、非西欧・非近代の中の性差別を見ないで称揚していること。③男性原理、女性原理の相補的二元論の中で相補的女性原理の称揚は、男性側からの文化と政治をそのままにすることに等しいこと。④調和的な前近代・非近代・

非西欧が近代によって壊れたという図式の単純さと「戻る」議論に対して批判がなされた（上野 1986）。性差別の根源を近代主義に還元し尽くせないように、女性解放の戦略をエコロジーに還元することはできない。前近代主義では近代主義は乗り越えられない、とも論じられた。

青木や上野の議論を受けて、1985年5月の日本女性学研究会シンポジウム「フェミニズムはどこへゆく：女性原理エコロジー」が持たれたが、そこでもエコフェミニズムは強い批判を受けることになった。主要な批判は、次の2点に集中した。1つは、近代批判の安易さと前近代称揚主義、周縁としての非近代という認識の欠如。もう1つは、女性原理と母性主義である。やはりここでも、表象化され、想像化された女性原理や母性に批判は集まった。そして、近代主義と前近代主義という対立軸がさらに明確化された。エコロジーやエコフェミニズムをよしとするのは前近代主義、という見方と評価が決定づけられ、避けられるようになった。結果として、「この論争を通じて、エコフェミは反近代主義・母性主義を導く危険思想だという雰囲気フェミニズム陣営に共有され、これ以降八〇年代後半にかけてエコフェミニズムが一種のタブーになった感すらある」（森岡 1995）。

## (2) 問題意識と概念形成のあいだの文化的制約によるずれ

上野と同様にエコフェミニズムを批判した江原由美子の観点は、上野のそれと異なっている。なぜ青木の議論の結論が、その問題意識や実践的結論が「良心的問題意識」に基づくにもかかわらず、前近代的な概念再生産になってしまうのか、という点に着目しているからだ。江原は、近代産業化がもたらす性や身体の抑圧や搾取、女性のアイデンティティ確立における捻じれについて、青木の批判的的確さをみてとった。その上で、近代産業化された女性原理を否定し、実践的な結論として女性原理を復権させたときの文化的制約について指摘した。すなわち、表象を復権させた本人の意図はどうあれ、その復権は前意識的な操作、人びとが知らないうちに組み込まれている文化の装置や知の制度の中でしかなしえない、という文化的制約による限界があることを指摘した。ゆえに、表象を復権させた者も、

その表象を改めて解釈する第3者も、現代日本社会に貫徹する前提を対象化することなくそのまま再生産する結果になってしまう（江原 1985：16）。

だからこそ、前意識的な操作、すなわち文化の装置とか知の制度を徹底的に解説し、解体して行かなければならない。本来の雌雄のバランスや女性性など誰も「正しく」定義などできず、それはいつでも虚構、フィクションになる。ゆえにわたしたちが必要なのは、江原が言うように、文化的制約を課す文化の装置や知の制度を対象化し、その虚構性を常に意識することである。そして、これこそが最も重要だが難しいことなのだが、当事者たちのリアルから実質的な生を生み出す実践によって、虚構とは違う着地点に居続けなければならない。それは、生活・自然指向を目指したりブの一部への江原の批判、「矮小化された近代主義批判」からの解放を、生活・自然志向を目指す方向に教条化させてしまった、という批判と背後で文脈を共有している。江原からすれば、生活・自然志向を教条化させたことは、この徹底的な虚構性の対象化の下での実践が持つ、既存の文化の装置や知の制度そのものを乗り越える可能性を自ら喪失してしまうことではない。

この江原の批判は、現在のエコフェミニズムにとっても重要な論点である。彼女は実践の場で作られる表象が持つ、既存の文化装置や知の制度を「ずらし」ていく、という方向性を示しているからだ。青木の議論も、この江原の批判からであれば、新たな展開もなされえたかもしれない。というのも、青木の思想の背景に、1950年代以降、先住民運動が文化を自分たちの手で再創造しながら権利闘争を同じ社会で行っていた、米国の同時代的空気を念頭におくと、別の構図が見えてくるからだ。当時、青木が出会ったホビ族をはじめとする米国の先住民は、文化的回復とそれによる土地・開発の権利回復の正統性の獲得、自分たちの手による社会経済開発へ向かっていた時期であり、先住民以外の人びとからの文化の消費（先住民以外からの先住民文化の掲揚、ツーリズム対象としての先住民文化など）が先住民たちの手によって再構築されていた（内田 2008）。たとえホスト社会（＝州あるいは連邦政府）の論理に獲りこまれることがある程度

分かっている、あえて「伝統文化」の再生を戦略的に行う。そして、ずらす（福永 2013）。

江原の指摘はここで生きる。「伝統文化」の再生が、その虚構性を自ら対象化しながら、生のリアルから、その実質的な生をより良くする実践になりえているか、その実践が隠された知の制度や文化装置を乗り越えられているか。青木の議論はこの点に言及せず、観念的にあるべき社会像を女性原理と宇宙原理で覆ってしまった。これは当時の初期エコフェミニズムの論者たちもたどってしまった道でもある。

では、虚構を対象化しながら、実質的な生を支えるにはどうすればよいのだろうか。エコロジーとフェミニズムの接点において考えるとどのようなことだろうか。そのことを再び、生への感度という問題から考えてみよう。

## 5. 生への感度から、再び

### (1) 90年代にエコフェミニズム再論はあったか

哲学者の森岡正博によると、エコフェミニズムに対する冷ややかな目線は、唯物論主義エコフェミニズムの担い手、メアリ・メラーの著書（『境界線を破る！』）の翻訳が出たあたりから少し変わってきたという。1994年にマリア・ミースと、メアリ・メラーを招待した日欧女性交流事業「女性・環境・平和」シンポジウムが開かれ、青木やよひと上野千鶴子が司会を務めた。上野千鶴子が環境問題に対する女性の闘いこそ今後のフェミニズムの重要課題であると指摘した。1996年には、このシンポジウムの内容をまとめた著書、メラーとミース、ヴェールホフに加え、鶴見和子も執筆した、上野千鶴子・綿貫礼子編『リプロダクティブ・ヘルスと環境：共に生きる社会へ』（工作舎）が出版された。上野は、「序」で以下のように端的に述べる。

女性が「環境」を語るのは、なにも女性が「産む性」だからではない。女性が男性に比べて「自然」に近いからでもない。男を「文化」に、

女を「自然」に押しつける従来の発想は、もはやだれにも許されない。ミースが言うように、「女と自然環境を《資源》としてしか扱わない市場経済から独立する道」を男女ともに模索すべき瀬戸際にきているのだ。（上野 1996）

この端的な言葉からもわかるように、上野が評価したのはミースらの歴史社会分析であってそれ以上ではない。資本主義や家父長制から独立する道として、ミースらが試みているサブシステム生産領域の再構築は本の中には示されていて、エコロジーとフェミニズムの接点は示されているが、そのものについての論者同士の議論は残念なならない。

ヴェールホフやミースらが指摘していたように、資本主義と家父長制は、他の文化的装置や知の制度と連動しながら、現存する公領域と（それに従う視えない領域として聖域化された）私的領域という二分化・疎外された領域に囲い込んできた。資源を収奪する場として自然化された自然環境と、同じく生命と労働を生み出し整える場として自然化された私的領域は、それぞれ違うものとして分かれていく。食べるもの、エネルギー、衣類などもまた、自分が暮らす生活空間（＝私的領域）から遠く離れたところで作られるようになる。

その現実から、生命を産み、生を生きる土台をつくる場所をどのように再構成するか。自然化と主婦化からどのように消費や生産を解き放てるか。労働の形は、社会の価値は、価値の序列という考えはどう問い直されるべきか。そのとき、自然はどのような存在となるのか。

これらの問いの答えを探す舞台となるのは、グローバルな生産と消費の構造と、同じように広がる文化装置や知の制度が、多様な位相を持つ権力として降りてくる場である生活空間である。そして、そこに暮らす人びとが実際に暮らすリアルの中から、実質的な生を選び取る中から、この問いと向き合わねばならない。だが実は、これらの問いに対し、すでに日本の中で、いやおうなく迫られて、誰か他者の生を預かるという中で、自分の身体と他者の身体、それぞれの生に向き合ってこざるを得なかった人々がいる。

日本において、苛烈な「自然化」がもたらした公害問題の被害者たちである。

## (2) エコロジーとフェミニズムの接点：公害という水脈

公害事件の場合は、母がその「役割」ゆえに、自分の手にゆだねられた他者の生、それ以外の他者の生、自己の生との残酷な境界と向き合うことを余儀なくされた「自然化」の現場であった。

水俣病事件において、胎児性水俣病を見出した医師の原田正純は、後に胎児性の患者たちだとわかる子どもたち、当時は小児麻痺だと言われていた子どもたちと母の話を書いている。重い症状を持つ子どもを抱えて、経済的に困り切った子どものお母さんが、水俣病だとわかれば助けられる、という役人の言葉を頼りに、保健所をまわり、大学で研究中と言われた。だが遠い大学病院までその子供を抱えては行けなかった。

そこでお母さんたちは、市立病院を訪ねる。すると、「1人、解剖するとわかるかもしれない」という言葉が返ってきたのである。お母さんたちは、決して口に出さなかったが、誰かが死ぬのを待ったのである。(原田 2007: 35)

原田はその後、自分が長く診ていた女兒の解剖から医学的成果を得て、胎児性水俣病の研究は医学界に発表されていく。そのことを続けて語る原田の言葉の続く行間は重い。原田は女兒の名前をきちんと、彼が呼んでいたままの個別具体的な名前で書いている。個別具体的な生を自分とそこに書きつけるように。

そのような被害にあった人びとの魂を、その痛みを、近代的な自我がとらえきれない「いのち」のことだと、石牟礼道子は、次のように語って捉えようとする。

……呂太后をもひとつの人格として人間の歴史が記録しているならば、僻村といえども、われわれの風土や、そこに生きる生命の根源に

対して加えられた、そしてなお加えられつつある近代産業の所業はどのように人格としてとらえられねばならないか。独占資本のあくなき搾取のひとつの形態と言え、こと足りてしまうか知れぬが、私の故郷にいまだに立ち迷っている死霊や生霊の言葉を階級の原語と心得ている私は、私のアニミズムとプレアニミズムを調査して、近代への呪術師とならねばならぬ。（石牟礼 1969）

石牟礼は、チッソが戦前の朝鮮半島で植民地開発を行っていたこと、湖南里とそこに住んでいた人びとの魂に思いをはせる。各地を訪ね、技術師の言葉を聞き、高群逸枝の家に行き、バクテリア研究の研究室で顕微鏡をのぞき、学術研究の議論を聞き、帰る。

そのようなことどもをおぼろげにきいて帰る。わたくしの抽象世界であるところの水俣へ、とんとん村へ。抽象の極点である主婦の座へ。ここはミクロの世界であるなどと思い、首をかしげてぼうとして坐る。（石牟礼、同上）

ミクロな生活の場、だが抽象世界としてさまざまな文明や自然や、資本主義の自然化の力が働いていくさま、働いたその後が見える場としての水俣と、それが見える立場としての「主婦」が、ここで語られている。それは「役割」であるが、「わたし」が世界を見る窓であり、世界が「わたし」に向かって降りてくる窓である。

わたしたちにとってエコフェミニズムは、ここから問い直すことである。青木が見出すべきは、このアニミズムとプレアニミズムと近代の呪術師の姿だった。先住民族にとっての切実性、自然化と主婦化のすすむ低開発国での切実性。青木はなぜ、その切実性をこの日本の、近代の呪術師たちの中に見出さなかったのだろうか。青木の思想とリアルとの断絶はそこにあった。日本のエコフェミニズムがああ論争でその可能性を大きく減じられてしまったのは、他ならぬこの呪術師たちのいる日本の「自然化」された人びとと場所のリアルを、捉えそこなっていたからだろう。

### (3) 生活の場から生への感度を手がかりに

さて、言うまでもなく、生活という志向、エコロジー運動の中にある母という表象や母性主義に関する、フェミニストたちからの「不信」は相当根深いものである。女性（あるいは同様の境遇に置かれた人びと）に対する支配の文化装置としてきわめて強力な制度であるからこそ、それと向き合わざるを得なかったからこそ、警戒は強い。だが、なぜ公害運動や反原発運動にて、実践でも思想でも重要な核となるのか、その理由も実は根深い。それは、人びとが生きるリアルなところ、生きる生活の場から、実質的な生を手繰り寄せる上での拠り所の表象であるからだ。

前に引いた、石牟礼の「主婦」という表現はそれを端的に表わしている。「役割」は社会の中でその人が立つ場所である。その立つ場所からは、他者の生を預かってきた、預かっている、自身の生もそこにある、他者の生ともそこにある、という事実にもとづく、ミクロな生への感度が見える。同時に、その「役割」が埋め込まれているもっと大きな表象の機制がもっとも降りてくる場所でもある。それは女性だから、ということに集約される敏感さではない。「わたし」がそこで身体と共に暮らし、ある「役割」を引き受け、他者の生と共に在るという事実から生まれる経験的な生への感度である。厄介なのは、しばしばこの「役割」のほうに先にその人を表現するものとしてその人本人よりも先んじていくことにある。そしてその疎外に、本人も気づかず、「役割」のほうを自分自身と思い、文化的装置として働く「役割」に囚われていく。

冒頭で問題化した、東日本大震災後、特に福島第一原発事故後の、生への感度をめぐる複雑な状況は、まさにその囚われに由来すると言ってもよい。生への感度は直感的であるがゆえに、それを言語化しようとするれば、まさに江原が指摘するような、すでに自分の身近にあり、中にある「役割」からの言葉、表象に頼らざるを得ない。その時点で、文化的装置や知の制度の中からは、言葉が離せなくなってしまう。囚われる。

鹿野政直は、平和運動や原水爆禁止運動の中で、特に平和を主題とする際、「母」の運動というフレーミングは、女性が運動を起こす上で男性や国家から身を守り、説得性を高め、無私の運動としての正当性を確保する

ための「無二の旗印」だった、と端的に指摘している（鹿野 2004）。無私の運動としてしか正当性が確保できなかった、ということは重要な指摘である。母とは無私のものである、という文化的装置の所在を表わすと共に、その装置の中にあることで、高い文化的価値を得られる、ということを示しているからだ。

もちろん、外側からのフレーミングも強い。水俣市民会議の会長を務めてきた日吉フミコ氏に対して、水俣病第一次訴訟の患者の先頭に立つ姿は「まさに母性そのものであり、一族を引具するかつての母権社会の族長を思わせる」という言葉が寄せられたのは、「水俣病を告発する会」の機関誌『告発』11号（1970年4月25日付）での表現である。

わたしたちは、このような文化的な装置、知の制度、そしてそれらを利用したり表象の中に閉じ込められたり、という微細な状況について、江原由美子が指摘するように、解き明かし、ほどいていく必要がある。それは、その場のミクロな営みにある、生への感度、その直感を発している、そしてさまざまな「役割」にひきずられている「わたし」を見出していくことでもある。

それこそが、日本のこの場にたつわたしたちにとっての、エコフェミニズムではないのか。表象化された「役割」、母であろうと、主婦であろうと、嫁であろうと、そこから人びとが感じ取った生への感度と直感を支える言葉を、それ自体が縛られている文化的な装置や知の制度を対象化しながら、生み出していくこと。その先にあるのが、ミースやベンホルト＝トムゼンらのいうサブシステム生産領域と重なるのかどうか、それはまたの機会に検討したいと思う。

## 【注】

- 1) 発表においては「いのちへの感度」を用いた。本稿の執筆にあたり、当日の議論を踏まえて、「いのち」では、人びとが身をおく生活という意味が想起されにくいと考え直し、「生への感度」と表現を改めた。
- 2) 本論ではエコロジーを、自然と人間の関わりについての思想運動全体を広く意味するものとして扱い、生態学とは区別する。自然と人間の連続性・

非連続性について、あるいは自然そのものの把握、法則の発見 (nature's economy)、理論化について、哲学的な思索から博物誌的観察、社会思想まで広く含む潮流を背景に持つ。そのため、社会運動や環境運動を支える議論がこの広い潮流から見出されたり、環境主義の中の思想に形を与えるものが見出されたりしてきた。「科学」的な「生態学」はその中から自然科学として確立していく。

- 3) 2013/4/16、フィールドノートの記述より。50代女性。
- 4) 三児の母である高村氏は、南相馬で震災の語り部をしながら、日々の率直な思いを「住む者」としての明晰な分析と瑞々しい文章でつづっている。福島民報の「民報サロン」に2014年から2015年にかけて掲載された一連の文章は、いのちへの感度のゆれ、その選択肢、自分自身のその選択に対する、そして周囲からの反応と評価の所在を率直に教えてくれると共に、その中で日々生きるということはどういうことか、柔らかな勁さと機知に富む人柄そのままに、追体験させてくれる。
- 5) 1971年7月15日、岡澤澄江の手によって興された文章「全学連第30回定期全国大会での性の差別＝排外主義と戦う決意表明」を参照（井上・上野・江原編 1994、再掲）。
- 6) 本論でリブとフェミニズムについては、1975年国際婦人年以降をフェミニズム、1970年から75年までをリブと呼ぶ。
- 7) ちなみに、優生保護法阻止連のメンバーの石塚友子は、①「母として」という発想が、子どもという他者を根拠にしたもので、それにより代弁者の母が無私の立場にある。他からの非難が来ない分、自己に相対することが少ない、②母性の絶対化・超自然化・神聖化をすることで、女の存在意義を母のみに認めるということになる、③母は常に被害者であり、主体的に悪になる原因を作っていない、ということから運動の中の母性主義を批判している。この点は本論の生への感度について議論する際にはとても興味深い。
- 8) 本論では、チェルノブイリ原発事故後、伊方原発反対運動、生協活動、風力発電建設などの一連の運動のことを指す。運動の主体は高学歴の専業主婦であった。

### 【参考文献】

- 青木やよひ、1986『フェミニズムとエコロジー』新評論（増補新版1994）。  
青木やよひ、1994『共生時代のフェミニズム：ひらかれた未来を求めて』オリジン出版センター。

- 青木やよひ編, 1983『フェミニズムの宇宙』新評論.
- Dobson, Andrew, 1991, "Ecofeminism," Andrew Dobson ed., *The Green Reader: Essays toward a Sustainable Society*. San Francisco: Mercury House.
- Eckersley, Robyn, 1992, *Environmentalism and Political Theory: Toward an Ecocentric Approach*, NY: State University of New York Press.
- 江原由美子, 1985『女性解放という思想』勁草書房.
- 福永真弓, 2013「自然資源の利用と管理をめぐるサケと「ウナギ」の有象無象：米国先住民ユロックの生活文化と資源管理の「飼いならし」」宮内泰介編『なぜ環境保全是うまくいかないのか：現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社：171-195.
- Gaard, Greta, 2011, "Ecofeminism Revisited: Rejecting Essentialism and Re-Placing Species in a Material Feminist Environmentalism," *Feminist Formations*, 23(2) : 26-53.
- Griffin, Susan, 1978, *Woman and Nature: The Roaring Inside Her*, New York: Harper & Row.
- 原田正純, 2005=2007, 「終章 水俣病公式発見から五〇年：宝子に思う」最首悟・丹波博紀編『水俣五〇年：ひろがる「水俣」の思い』作品社：335-353.
- 原田正純, 2007『豊かさと棄民たち：水俣学事始め』岩波書店.
- 井上輝子, 上野千鶴子, 江原由美子編, 1994『リブとフェミニズム』岩波書店.
- 石牟礼道子, 1969『苦海浄土』講談社.
- 石塚友子, 1991「『運動の中の母性主義』について思う」グループ母性解読講座編『「母性」を解読する』有斐閣：250-1.
- 鹿野政直, 2004『現代日本女性史』有斐閣.
- King, Ynestra, 1989 "Healing the wounds: Feminism, ecology, and nature/culture dualism," in Alison M. Jaggar & Susan Bordo (eds.), *Gender/Body/Knowledge: Feminist Reconstructions of Being and Knowing*, Rutgers University Press: 115-141. (=1994, 奥田暁子・近藤和子訳, 「傷を癒す：フェミニズム, エコロジー, 自然-文化二元論」アイリーン・ダイヤモンド, グロリア・フェマン・オレンスタイン編『世界を織りなす：エコフェミニズムの開花』学藝書林.) 邦訳は1991年再掲本の翻訳.
- 近藤和子・大橋由香子編, 2012『福島原発事故と女たち：出会いをつなぐ』梨の木舎.
- 松本麻里, 2011「水のおもさと, 反原発」『現代思想』10月号, 青土社.
- McIntosh, R. P., 1985, *The Background of Ecology: Concept and Theory*, Cambridge, U. K.: Cambridge.

- Mellor, Mary, 1992, *Breaking the Boundaries: Towards a Feminist Green Socialism*, London: Virago. (=1993, 壽福眞美・後藤浩子訳、『境界線を破る！エコフェミ社会主義に向けて』新評論.)
- Mellor, Mary, 1997, *Feminism & Ecology*, Cambridge: Polity Press.
- Merchant, Carolyn, 1980, *The Death of Nature: Women Ecology and the Scientific Revolution*, Haper & Row Publishers. (=1985, 団まりな・垂水雄二・樋口裕子 訳、『自然の死——科学技術と女・エコロジー』工作社.)
- Mies, Maria and Bennholdt Veronika Thomsen, 1999, *The Subsistence Perspective: Beyond the Globalised Economy*, London: Zed Books.
- Mies, Maria, 1986, *Patriarchy and Accumulation on a World Scale: Women in the International Division of Labour*, London: Zed Books. (=1997, 奥田暁子訳『国際分業と女性——進行する主婦化』日本経済評論社.)
- Mies, Maria, Claudia Von Werlhof, and Bennholdt Veronika Thomsen, 1988-91, *Women: The Last Colony*, London: Zed Books. (=1995, 古田睦美・善本裕子訳『世界システムと女性』, 藤原書店.)
- Mies, Maria and Vandana Shiva, 1993, *Ecofeminism*, London and New York: Zed Books.
- 森岡正博, 1995 「エコロジーと女性——エコフェミニズム」小原秀雄監修『環境思想の系譜・3』東海大学出版会：152-162.
- 大越愛子, 1996a 『闘争するフェミニズムへ』未来社.
- 大越愛子, 1996b 『フェミニズム入門』ちくま新書.
- 大橋由香子, 2012 「しがらみ, なりゆき, あきらめの中での, 一人ひとりの選択を大切にしたい：母性, フェミニズム, 優生思想」近藤和子, 大橋由香子編『福島原発事故と女たち：出会いをつなぐ』梨の木舎.
- Phillips, Mary, and Nick Rumens eds., 2015, *Contemporary Perspectives on Ecofeminism*, Routledge: London, UK.
- 桜井裕子, 1990 「エコロジカル・フェミニズム論争は終わったか」江原由美子編『フェミニズム論争：70年代から90年代へ』勁草書房.
- 高村美春, 2013, 「記憶——南相馬・ある家族の2年」『震災学vol. 2』：112-123.
- Thompson, Charis, 2006, Back to Nature?: Resurrecting Ecofeminism after Poststructuralist and Third-Wave Feminisms, *Isis*, 97(3) : 505-512.
- 内田綾子, 2008 『アメリカ先住民の現代史：歴史的記憶と文化継承』名古屋大学出版会.
- 上野千鶴子, 1986 『女は世界を救えるか』勁草書房.
- 上野千鶴子, 1994 『『進歩と開発』という名の暴力』『世界』1994年10月号：

225-233.

ヴェール, ウルリケ, 2012 「『脱原発』の多様性と政治性を可視化する」『大震災とわたし』ひろしま女性学研究所.

Warren, Karen J., 2000, *Ecofeminist Philosophy: A Western Perspective on What It Is and Why It Matters*, Lanham: Rowman & Littlefield.

横川道史, 2007 「日本におけるフェミニズムとエコロジーの不幸な遭遇と離別：フェミニズムとエコロジーの結節点に関する一考察」『技術マネジメント』vol. 6 : 21-33.